九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 運動部と文化部における部活動適応感尺度の検討

須﨑, 康臣
九州大学基幹教育院

池本, 雄基
九州大学大学院人間環境学府

兄井, 彰
福岡教育大学教育学部

杉山, 佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

他

https://doi.org/10.15017/1916215

出版情報：健康科学. 40, pp.41-47, 2018-03-20. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

健 康 科 学
Vol.40, 2018 年 3 月

－原　著－

# 運動部と文化部における部活動適応感尺度の検討

須﨑康臣 [1)]，池本雄基 [2)]，兄井　彰 [3)]，杉山佳生 [4)]，斉藤篤司 [4)*]

# Development of the School Club Adjustment Scale for athletes and non-athletes

Yasuo SUSAKI [1)], Yuki IKEMOTO [2)], Akira ANII [3)] Yoshio SUGIYAMA [4)], and Atsushi SAITO [4)*]

**Abstract**

The purpose of this study was to develop the School Club Adjustment Scale (SCAS) for students who participate in extracurricular activities. Participants were 894 students (junior high school students: 192; 92 boys, 100 girls; high school students: 266; 126 boys, 140 girls; and university students: 436; 298 boys, 138 girls), comprising 662 athletes and 232 non-athletes, who completed a questionnaire including the SCAS, summarized adjustment feelings, and satisfaction with the club. An exploratory factor analysis revealed that the SCAS comprised the following 3 factors: commitment, maladjustment, and satisfaction with club membership. A confirmatory factor analysis indicated goodness of fit indices for the 3-factor structure of the SCAS in the athlete group and the total sample. All subscales of the SCAS showed sufficient reliability and concurrent validity in all student groups. The results of an analysis of variance indicated a significant mean difference in the SCAS score based on type of school, but the effect sizes ($\eta^2$) was very small.

***Key words*:** junior high school student, high school student, university student

(Journal of Health Science, Kyushu University, 40: 41-47, 2018)

1 九州大学基幹教育院, Faculty of Arts and Science, Kyushu University, Japan.
2 九州大学大学院人間環境学府, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.
3 福岡教育大学教育学部, Faculty of Education, Fukuoka University of Education, Japan.
4 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.
*連絡先：九州大学大学院人間環境学研究院　〒816-8580　福岡県春日市春日公園 6-1　Tel & Fax：092-583-7854
*Correspondence to: Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga City, 816-8580, Japan.
Tel & Fax: +81-92-583-7854　E-mail: saito@ihs.kyushu-u.ac.jp

## はじめに

これまで部活動は，生徒や学生が充実した学校生活を送るといった恩恵を得る場の 1 つとして期待されてきた。しかしながら，単に部活動に所属しているだけでは恩恵を得ることは難しく，個人が部活動と良好な関係にあることの重要性が指摘されている[1,2]。この個人と部活動の関係を捉える概念として，適応が挙げられる。適応とは,「個人と環境の調和」[3] のことであり，これを捉える指標の 1 つに適応感がある。適応感は，適応の過程ではなく，その状態を表す指標とされている[3]。そこで，本研究では，部活動の適応について，適応感を用いて，生徒と学生の部活動適応感について検討する。そして，部活動適応感を「部員個人が，部生活において自己を良好な適応の状態にあると意識していること，あるいは，その状態を近い将来獲得する可能性を認めていること」[4] と定義した。

これまで，部活動適応感を測定する尺度は作成され，部活動に関する検討が行われている。しかし，須﨑ら[5] が指摘するように，これまでの部活動適応感尺度は，運動部や文化部のいずれかを対象としたものが多い[4,6-10]。運動部と文化部を含めて検討した尺度は，渡辺・大重[11] と須﨑ら[5] に限られている。そのため，運動部だけではなく，文化部を含めた部活動適応感尺度を作成することは，それぞれが有する効果や特徴の違いについて明確にすることができる[5] ため重要なことであると考えられる。

さらに，運動部と文化部を対象とした部活動適応感尺度は，渡辺・大重[11] によって中学生を対象に，須﨑ら[5] によって大学生を対象に作成されている。このように部活動適応感尺度は，校種ごとに作成されてきたため，発達段階による部活動適応感の変化を検討することができないという問題点を有している。そのため，学校生活における部活動の在り方を検討するためには，中学生から大学生までに適用できる部活動適応感を作成する必要があると考えられる。

以上のことから，本研究では，運動部と文化部に所属する中学生，高校生，大学生を対象とした部活動適応感尺度を作成し，この尺度の信頼性と妥当性について検討することを目的とする。そして，校種による部活動適応感の特徴の違いについて検討する。

## 方法

### 1. 調査対象者および調査時期

中学生，高校生，大学生を対象に 201X 年 6 月に調査を行った。調査の同意を得られ，欠損が無く，部活動に所属している 894 名 (男子 516 名, 女子 378 名) を分析対象とした。中学生は 192 名 (男子 92 名，女子 100 名; 13.42±.50 歳)，高校生は 266 名 (男子 126 名，女子 140 名; 16.32±.47 歳)，大学生は 436 名 (男子 298 名，女子 138 名; 18.77±1.42 歳) であった。部活動の所属の有無の回答を求めた際に，運動部か文化部を選択させ，それを基に部活動の分類を行った。部活動所属の内訳としては，運動部は 662 名，文化部は 232 名であった (表 1 )。運動部の活動種目は，野球，サッカー，陸上競技，バスケットボール，バドミントン，アメリカンフットボール，ラクロス，硬式・ソフトテニス，ゴルフ，バレーボール，競泳，卓球，空手，剣道，柔道，テコンドー，弓道，洋弓，ダンス，アイスホッケー，ハンドボール，ヨット，トライアスロンであり，文化部の活動内容は，英語研究，生物研究会，混声合唱，軽音，美術，書道，茶道，吹奏楽，オーケストラ，囲碁，調理，ボランティアであった。

### 2. 調査項目

#### 2-1. 部活動適応感尺度

須﨑ら[5] が作成した部活動・サークル適応感尺度を用いた。この尺度は,「活動への積極性」,「不適応傾向」,「成員・組織への満足」の 3 つの下位尺度から構成される。活動への積極性は，部活動に対する傾倒や活動への関わり方を示す項目から構成されている。不適応傾向は，部活動での活動や所属に対する困難さを示している。成員・組織への満足は，部活動に所属する仲

表 1　分析対象者の内訳

| | 運動部 | 文化部 | 計 |
|---|---|---|---|
| 中学生 | 154 | 38 | 192 |
| 高校生 | 202 | 64 | 266 |
| 大学生 | 306 | 130 | 436 |
| 計 | 662 | 232 | 894 |

間や所属先に対する満足感を示すものである。活動の積極性は，部活動内での行動を示す項目が含まれている。本研究で用いている適応感は，適応の過程ではなく，適応の状態を表すものである [3]。部活動での具体的な行動は，その適応の過程に類するものと考えられるため，これに該当する項目である「誰よりも上手になろうと努力している」，「辛い練習でも自分に役立ちそうであれば積極的に練習している」，「活動以外にも自分のできる目標を立てて練習している」を除いた。そのため，本調査で用いた部活動適応感を構成する項目は，活動への積極性は 4 項目，不適応傾向は 5 項目，成員・組織への満足は 6 項目であった。回答は，1「全くあてはまらない」，2「あてはまらない」，3「あてはまる」，4「よくあてはまる」の 4 件法で求めた。中学生と高校生に対する教示文は，「部活動での練習 (活動) について回答して下さい」であった。大学生に対する教示文は「部活動・サークルでの練習 (活動) について回答して下さい。サークルに所属している人は，部活動をサークルで回答して下さい。」であった。

### 2-2. 部活動の総括的適応感

桂・中込[4]は，運動部活動における部活動適応感を測定するための尺度を作成しており，その中に総括的適応感を測定するため項目がある。総括的適応感は，現在と将来の部活動に対する適応感の内容から構成されている。項目には，「今の部活動に入ってから，これまでの私の部活動での生活は，全体としてうまくいっている」「これからの私の部活動での生活は，全体としてうまくいくと思う」を用いた。回答は，1「全くあてはまらない」，2「あてはまらない」，3「あてはまる」，4「よくあてはまる」の 4 件法で求めた。得点が高いほど，部活動における総括的適応感が高いことを意味する。中学生と高校生に対する教示文は，「部活動での練習 (活動) について回答して下さい」であった。大学生に対する教示文は「部活動・サークルでの練習 (活動) について回答して下さい。サークルに所属している人は，部活動をサークルで回答して下さい。」であった。

### 2-3. 部活動の満足感

部活動の満足感を測定するために，「部活動には満足感している」という項目を用いて回答を求めた。回答は，1「全くあてはまらない」，2「あてはまらない」，3「あてはまる」，4「よくあてはまる」の 4 件法で求めた。中学生と高校生に対する教示文は，「部活動での練習 (活動) について回答して下さい」であった。大学生に対する教示文は「部活動・サークルでの練習 (活動) について回答して下さい。サークルに所属している人は，部活動をサークルで回答して下さい。」であった。

### 3. 手続き

調査は，授業時に集合法で行った。調査に際して，調査の目的，個人情報の守秘の誓約，回答は任意であり，得られたデータは研究以外の目的で使用しないことを文章と口頭にて説明を行い，合意が得られた者から回答を得た。なお，本調査は九州大学大学院人間環境学研究院健康・スポーツ科学講座倫理委員会の承認 (201703) を得て，実施された。

### 4. 統計処理

部活動適応感尺度の因子構造を探索的に確認するために，探索的因子分析 (重み付き最小二乗法のプロマックス回転) を行った。探索的因子分析では，固有値 1.0 以上を基準として因子数を抽出した。また，因子負荷量が.40 未満の項目と 2 つ以上の因子が 1 つの項目に対して.35 以上の因子負荷量を示した項目の削除を行った。また，抽出された因子構造のデータに対する当てはまりの良さを確認するために検証的因子分析を行った。この分析の適合度指標として，CFI, GFI, RMSEA を用いた。CFI と GFI は.900 以上とし，RMSEA は.080 未満を基準とした。そして，この因子構造が校種で等しいか検討するために，多母集団同時分析を行った。この時，配置不変からパス係数，切片，誤差変数と制約を課していき，校種でモデルが適合するかを検討した。ここで用いた適合度指標は，CFI と RMSEA であった。この分析後に尺度の信頼性と妥当性を検証した。信頼性は，クロンバックの α 係数を算出した。妥当性は，基準関連妥当性を検討するために，部活動適応感と部活動の総括的適応感および満足感との相関分析を行った。最後に，校種 (中学生・高校生・大学生) で部活動適応感得点の違いについて検討するために，分散

分析を行った。なお，有意水準は 5%未満とした。分析ソフトは，SPSS (Ver19.0) と Amos (Ver19.0) を使用した。

## 結果および考察

部活動適応感尺度の因子構造を検討するために，探索的因子分析を行った。その結果，3 因子が抽出された。因子 1 は「部活動は自分の生活にとってなくてはならない」，「部活動のない学校生活は考えられない」といった項目から構成されており，「活動への傾倒」と命名した。因子 2 は「学校の勉強と両立することができなくなった」，「自分の意志が弱く，部活動を辞めてしまおうと考えることがよくある」といった項目から構成されており，「不適応傾向」と命名した。因子 3 は「部活動では部員みんなを信頼している」，「自分の所属している部活動はまとまりがある」といった項目から構成されており，「組織・成員への満足」と命名した。

探索的因子分析で抽出された因子構造を検証するために，検証的因子分析を行った。その際，須崎ら [5] に準拠し，「部活動は自分の生活にとってなくてはならない」と「部活動のない学校生活は考えられない」に共分散を仮定した。分析の結果，GFI=.943，CFI=.939，RMSEA=.064 を示していた。この時の潜在変数から観測変数への影響指数 (標準化偏回帰係数=$\beta$) を確認したところ，「学校の勉強と両立することができなくなった」の影響指数は β=.46 と他の項目に比べて低い値を示していた。校種別に確認したところ，中学生は β=.55，高校生は β=.30，大学生は β=.53 という値を示していた。そのため，この項目を除き，再度検証的因子分析を行った。その結果，各適合度指標は，GFI=.945，CFI=.942，RMSEA=.032 を示していた。この時の影響指数は β=.60—.81 の値を示し，共分散は $r$=.45 を示していた。次に，校種で因子の構造が等しいかを検討するために，校種での多母集団同時分析を行った。その結果，誤差変数にまで制約を課したモデルが基準を満たす結果が得られた (表３)。このことから，部活動適応感尺度は，中学生と高校生，大学生で同一の因子構造であることが考えられる。

次に，部活動適応感尺度の信頼性を検討するために，校種別にクロンバックの α 係数を算出した。その結果，中学生は α=.76—.86 の範囲を，高校生は α=.71—.87 の範囲を，大学生は α=.78—.84 の範囲を示していた (表４)。このことから，尺度は概ね満足のできる信頼性を有していることが考えられる。

部活動適応感尺度の妥当性は，基準関連妥当性から検討した。基準関連妥当性では，部活動適応感尺度と部活動の総括的適応感および満足感からの相関係数を校種別に算出した。その結果，全ての校種において，活動への傾倒は総括的適応感 (中学生 $r$=.62, $p$<.05; 高校生 $r$=.53, $p$<.05; 大学生 $r$=.72, $p$<.05) および部活動の満足感 (中学生 $r$=.66, $p$<.05; 高校生 $r$=.60, $p$<.05; 大学生 $r$=.63, $p$<.05) と正の関係を有していることを示していた。成員・組織への満足は全ての校種で，総括的適応感 (中学生 $r$=.71, $p$<.05; 高校生 $r$=.65, $p$<.05; 大学生 $r$=.76, $p$<.05) および部活動の満足感 (中学生 $r$=.65, $p$<.05; 高校生 $r$=.62, $p$<.05; 大学生 $r$=.71, $p$<.05) と有意な正の関係が確かめられた。不適応傾向において，全ての校種で，総括的適応感 (中学生 $r$=－.58, $p$<.05; 高校生 $r$=－.55, $p$<.05; 大学生 $r$=－.47, $p$<.05) および部活動の満足感 (中学生 $r$=－.55, $p$<.05; 高校生 $r$=－.56, $p$<.05; 大学生 $r$=－.45, $p$<.05) と有意な負の相関を示していた。これらの結果は表５に示した。総括的適応感は，部活動の現在と未来における適応状態を測定するためのものである。そして，部活動の満足感は，部活動に対する満足の程度を調べている。このことから，総括的適応感が部活動適応感尺度の活動への傾倒および成員・組織への満足との間に正の関係を有することが確かめられたことは，妥当なことである。また，部活動への不適応状態を示す不適応傾向が，総括的適応感と部活動の満足感と負の関係を有することは，妥当な結果である。さらに，本研究で示す結果について，部活動適応感と現在の適応状態および部活動の価値観との間に有意な関係が確かめられた先行研究 [5] の結果と同等であり，部活動適応感を測定する尺度として妥当であると考えられる。このことから，部活動適応感尺度は，一定の妥当性を有していることが推察される。

部活動適応感の下位尺度を従属変数，校種を独立変数とした，一要因分散分析を行った (表６)。その結果，活動への傾倒は主効果が有意であり ($F$(2, 891=3.51, $p$=.03, $\eta^2$=.008)，運動部は文化部より活動への傾倒が有意に高かった。このことから，運動部に所属する生徒

表２　部活動適応感の探索的因子分析結果（最尤法・プロマックス法）

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
|---|---|---|---|
| 因子1：活動への傾倒 | | | |
| 部活動は自分の生活にとってなくてはならない | **.88** | -.03 | .02 |
| 部活動のない学校生活は考えられない | **.87** | -.02 | -.04 |
| 活動以外の時でも、今やっている部活動のことを考えることがよくある | **.59** | .00 | .11 |
| 部活動の時間がくるのが待ち遠しい | **.46** | -.20 | .23 |
| 因子2：不適応傾向 | | | |
| 学校の勉強と両立することができなくなった | .22 | **.64** | .03 |
| 自分の意志が弱く、部活動を辞めてしまおうと考えることがよくある | -.16 | **.63** | -.04 |
| 厳しい練習についていけない | -.07 | **.62** | -.01 |
| 部活動に入っていることで、自分のやりたいことができなくて困っている | -.06 | **.60** | -.06 |
| 部活動 (行っている内容、種目) は自分に向いていない | -.13 | **.59** | -.01 |
| 因子3：成員・組織への満足 | | | |
| 部活動では部員みんなを信頼している | -.03 | .02 | **.81** |
| 自分の所属している部活動はまとまりがある | -.08 | .05 | **.70** |
| 部活動の仲間に満足している | -.04 | -.08 | **.66** |
| 部活動の仲間は、私のことをわかってくれている | .09 | .02 | **.62** |
| 私の部活動は、部員一人ひとりの意思を大切にしている | .12 | -.06 | **.52** |
| 部活動に入っていることで、人間的に成長する | .29 | -.04 | **.44** |
| 因子間相関 因子1 | | -.31 | .61 |
| 因子2 | | — | -.36 |

表３　部活動適応感の検証的因子分析結果

| | CFI | RMSEA |
|---|---|---|
| 配置不変 | .945 | .038 |
| パス係数への制約 | .942 | .037 |
| 切片への制約 | .919 | .041 |
| 誤差変数への制約 | .901 | .043 |

表４　校種別での部活動適応感尺度のα係数

| | 活動への傾倒 | 不適応傾向 | 成員・組織への満足 |
|---|---|---|---|
| 中学生 | .86 | .76 | .80 |
| 高校生 | .87 | .71 | .82 |
| 大学生 | .84 | .78 | .84 |

表５　校種別での部活動適応感尺度の相関分析

| | | 活動への傾倒 | 不適応傾向 | 成員・組織への満足 |
|---|---|---|---|---|
| 中学生 | 総括的適応感 | .62* | -.58* | .71* |
| | 部活動の満足感 | .66* | -.55* | .65* |
| 高校生 | 総括的適応感 | .53* | -.55* | .65* |
| | 部活動の満足感 | .60* | -.56* | .62* |
| 大学生 | 総括的適応感 | .72* | -.47* | .76* |
| | 部活動の満足感 | .63* | -.45* | .71* |

*$p$<.05

表６　部活動適応感の分散分析結果

| | 中学生(n=192) | | 95%信頼区間 | | 高校生(n=266) | | 95%信頼区間 | | 大学生(n=436) | | 95%信頼区間 | | 校種(2,891) | | 多重比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | 下限 | 上限 | M | SD | 下限 | 上限 | M | SD | 下限 | 上限 | $F$値 | $\eta^2$ | |
| 活動への傾倒 | 12.36 | (2.81) | 11.96 | 12.76 | 11.88 | (2.92) | 11.53 | 12.24 | 11.73 | (2.59) | 11.49 | 11.98 | 3.51* | .008 | 中学生＞大学生 |
| 不適応傾向 | 7.53 | (2.56) | 7.17 | 7.90 | 7.49 | (2.16) | 7.23 | 7.75 | 7.35 | (2.14) | 7.15 | 7.55 | .54 | .000 | |
| 成員・組織への満足 | 19.36 | (3.06) | 18.93 | 19.80 | 19.24 | (3.00) | 18.88 | 19.61 | 18.83 | (2.90) | 18.56 | 19.11 | 2.78 | .000 | |

カッコ内は標準偏差　　*$p$ <.05

と学生は，文化部に所属する生徒と学生より所属先での活動に傾倒していることが考えられるが。しかしながら，効果量の値は小の基準を満たしておらず [12]，サンプルサイズがもたらす第 1 種の過誤が推察される。そのため，運動部に所属する生徒と学生と文化部に所属する生徒と学生は，部活動への傾倒に有意な差がない可能性が考えられる。

不適応傾向 ($F$(2, 891=.541, *ns*, $\eta^2$=.00) と成員・組織への満足 ($F$(2, 891=2.78, *ns*, $\eta^2$=.00) は有意な主効果は確かめられなかった。このことから，校種によって部活動に所属する生徒と学生で，部活動に対する不適応傾向と所属先とそこに在籍する仲間への満足感に有意な差がないことが推察される。

## まとめ

本研究は，中学生，高校生，大学生を対象に，運動部と文化部における部活動適応感尺度の作成し，この尺度の信頼性と妥当性について検討することを目的とした。その結果，部活動適応感尺度は「活動への傾倒」，「不適応傾向」，「組織・成員への満足」の 3 因子構造であることが確かめられた。そして，多母集団当時分析を通して，中学生と高校生，大学生においてこの因子構造は，等しいがことが示された。次に，部活動適応感尺度の信頼性と妥当性を検討した結果，各校種ともに概ね満足のできる値を示していた。最後に，校種によって部活動適応感が異なるかを検討した結果，活動への傾倒で有意な差が確かめられた。しかしながら，この時の効果量は小の基準を満たしておらず，サンプルサイズが有意をもたらす第 1 種の過誤の可能性が示された。そのため，校種によって部活動適応感に違いがない可能性が示された。

## 謝辞

この研究は，笹川スポーツ財団の「笹川スポーツ研究助成」の助成金を受けて実施しています。

## 引用文献

1) 岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響: 部活動のタイプ・積極性に注目して. 教育心理学研究, 57 (4): 419-431.

2) 角谷詩織・無藤隆 (2001) 部活動継続者にとっての中学部活動の意義: 充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて. 心理学研究, 72(2): 79-86.

3) 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討―. 教育心理学研究, 53: 307-319.

4) 桂和仁・中込四朗 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因. 体育学研究, 35 (2): 173-185.

5) 須﨑康臣・杉山佳生・斉藤篤司 (2017) 大学生における運動系と文化系の部活動・サークル適応感尺度の開発. 健康科学, 39: 89-95.

6) 青木邦男・松本耕二 (1997) 高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因, 42: 215-232.

7) 雨宮怜・上野雄己・清水安夫 (2013) 大学生運動部員版部活動適応感尺度の開発―部活動内対人交流場面におけるソーシャルスキルとの関連性の検討―. 学校メンタルヘルス, 16(2): 170-181.

8) 吉村斉 (2005) 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係. 教育心理学研究, 53: 151-161.

9) 越良子・関澤敬子 (2010) 中学校文化系部活動におけるソーシャル・サポートと適応感との関連. 上越教育大学研究紀要, 29: 67-73.

10) 佐川馨 (2008) 音楽系部活動に所属する高校生の部活動適応感測定尺度作成の試み. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 30: 53-63.

11) 渡辺弥生・大重啓 (2010) 中学生の部活動における顧問のリーダーシップが学校適応に及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要, 62: 95-112.

12) 水本篤・竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために―基礎的概念と注意点―. 英語教育研究, 31: 57-66.